

## 『かもめのジョナサン』【完成版】

リチャード・バック 著 五木寛之 創訳 新潮文庫 637円(税込)

### 40年以上の時を経て加えられた物語の最終章は…

会員 竹内 留美 (66期)



今回、ご紹介する「かもめのジョナサン」は、1970年に米国で発表されてベストセラーとなり、1974年に日本語訳が出版されたとても有名な物語ですので、お読みになったことがある方も多いと思います。私がこの本と出会ったのは、小学生の頃のことです。「かもめのジョナサン」というシンプルでわかりやすいタイトルから、「かもめさんが頑張る冒険の話なのかな」と思って手に取りました。かもめの写真がふんだんに使われ、文章の表現もわかりやすく、一気に読んだことを覚えています。

この物語は、かもめのジョナサンが「飛ぶ」シーンから始まります。多くのかもめにとって、「飛ぶ」ということは、食物を得るためのごく簡単な日常的行動であって、重要なのは飛ぶことではなく食べることにあり、その行動を高めていく必要はありませんでした。しかし、ジョナサンは「飛ぶ」ことに「喜び」を感じており、食物を取ることもそっこのけで練習を続け、ついにかもめの限界を突破し高い飛行技術を身につけます。ところが、このような行動は他のかもめには奇異に映り、「かもめ一族の尊厳と伝統をけがした」とみなされ、ジョナサンは群れを追放されてしまいます。

こうして、一度は群れを離れたジョナサンですが、その後、ジョナサンと同じように飛ぶことを研究するかもめ達と出会い、飛ぶことだけでなく「他者への優しさ」も学んだことで、自分が得た「飛ぶことの喜び」「自由への喜び」を他のかもめ達に伝えたいと、追放された群れに再び戻っていきます。群れに戻ったジョナサンは、若いかもめ達に自分の経験や考えを伝授し、すべてのかもめは縛られることなく「自由」であるというジョナサンの考えは、彼の教え子たちによって他のかもめに伝えられていきます。

出版された当時、「かもめのジョナサン」には、第3章までしか存在していませんでした。ご紹介したあらすじも第3章までの内容を踏まえて書いたものです。ところが、その後、2013年に最終章（第4章）が追加された「かもめのジョナサン（完成版）」が発表されることとなりました。完成版の序文によれば、出版当時は、第4章は必要がないと考え作者自身がカットしたものの、その後、二十一世紀に入って原稿を改めて見返す機会があり、時代の変革もあって発表したいと考えたようです。

完成版に追加された第4章は、第3章までの物語の方向性をがらりと変えてしまうもので、自由を尊ぶジョナサンの教えが、時を経るとこのような形になってしまうのかと切ない気持ちにさせられるのですが、第4章を読み切ってから、それまでの第1章から第3章までを振り返ると、随所にちりばめられていたジョナサンの「不安」が第4章で現実化したことや、そんな中でもジョナサンが考えていたのは常にシンプルなことだったのだということがわかり、私個人の感想としては、飛ぶことに始まり飛ぶことに終わるジョナサンの物語の結末として、第4章の存在はなくてはならないものだなと感じました。

そして、40年以上の時を経て追加されたジョナサンの物語の最終章は、子どもの頃は純粋にジョナサンの行動にわくわくしていたのに、大人になってからは現実世界の投影としてジョナサンの行動の意味を深読みし、なんとなく人生の真理みたいなものを学んだ気になっていた私に対して、「人生そんなに難しく考えることはないんだよ」と、子どもの頃の気持ちを再認識させてくれるものでもありました。

「かもめのジョナサン」は、子どもの時に読んでも、大人の時に読んでも、その時代ごとに得られるものがある、そんな不思議な作品です。一度はお手に取ってみてはいかがでしょうか。